

助け合い育む団地の湯



寒風吹きさらす年末のある日、小田原市蓮正寺の「ふれあい処ひよすみ」を訪れると、地域のお年寄りが足湯を囲んでいた。「今日はよそ行きの服装

命を支え 70年

かながわの戦後 第一部 5

足湯で利用者と話す時田さん(左)。気楽に立ち寄れる「地域のえんがわ」が目標だ。小田原市蓮正寺

「団地は地縁も血縁もない人たちが暮らしており、孤立しがち。集まって人間関係を結ぶ場が必要なんです」と時田さん。足湯は気軽に立ち寄ってもらうための仕掛けだ。ユニークな実

践は注目を集め、視察が絶えない。時田さんたちの団体は高齢者や地域福祉の分野で、国や自治体に先駆けた取り組みで知られてきた。その原点は、戦争の体験にあると時田さんは言う。

開設を提案したのは社会福祉法人小田原福祉会の理事長、時田純さん(87)。公費の支援は2年で終わったが、持ち出して運営を続ける。ここを拠点に、地域の支え合いの動きも生まれ

た。団地が並ぶ一角で空き店舗を改装し、住民が集まる場として2010年にできた。保健師らが語る地域包括支援センターに併設する。

守られているはずの地が突然、最前線になった。中国人学生の実家にも通問あまりかまわれた後、首都新京(現・長春)から偽軍

隊が満州になれ込む。頼りの関東軍は南方戦線に主力を取られ、抵抗する力は残っていなかった。

しかも建大は国家高層を養成する場だ。戦場には行かないし、精強な関東軍が守ってくれると信じていた。「五族協和」を掲げた大学で中国やロシアの若者と寮に暮らし、語り合った。

終戦前年の1944年、中国東北部の満州に渡り、満州国立建国大学に入った。多くの同級生が軍隊に入って海外に出る時代。不安はなかった。

だね。「すてきじゃない」常連さんの会話が弾む。記者も一緒に20分ほど湯につかると、冷え切っていた体が汗ばむほど温まった。

満州の死線越え「国あてにしない」

施設の理念に「人は人として存在するだけで尊い」と掲げた。戦争で命の尊さを

母の暮らす小田原市に向かった。家は終戦直前の空襲で焼けていた。バラックで暮らし、魚の担ぎ屋をして生計を立てた。

市役所に職を得たことが転機になった。生活保護を皮切りに福祉畑を歩んだ。保護費の支給日には窓口

に受給者が列をなし、邪魔者扱いする人もいた。高齢者施設は寝たきりの人であふれた。福祉施策の貧しさを感ぜ、市議を経て7年に特養ホームを立ち上げた。

敗戦後の混乱で海を渡れぬ。豆を露店で売って生活費を得た。帰国したのは47年3月。終戦から1年半以上が経っていた。国家の庇護もなく、危険を感じながら異国で過ごした日々はトラウマになった。無敵の関東軍などおらず、情報統制で戦況の悪化も知らされなかった。確信が残った。「国家を信じてはいけない」

◆次回は「伊勢佐木の70年」です。

「尊厳は時田純さん自身で守るべき」

「戦争を知らない世代が大半になった今、若い人たちに伝えたい。「平和な社会があつて初めて命が守られ、社会保障を考えられる。その尊さをかみしめてほしい」(太田豊生)

だが「国家をあてにしてはならない」との思いは今も強い。一昨年には、生活保護の隙間を埋める独自の貧困者支援に乗り出した。次の仕事を探したり生活保護の手続きをしたりする間、相談員が付き添い、必要なら食料を現物支給する。「自立自立。自分たちで道を作りたい」という。

を知ったからだ。施設で暮らすことを望む人はいない」と言う。施設介護が中心の時代に、高齢になってもできるだけ自宅で暮らせる仕組み作りに取り組んだ。在宅高齢者には年中無休で食事を届け、24時間の訪問介護も国や自治体に先駆けて実現した。戦後70年。福祉は格段に手厚くなった。時田さんたちも時には、国や自治体と手を携えて事業を進める。

天気	6	9	12	15	18	21	時
東京	14	14	14	14	14	14	14
横浜	14	14	14	14	14	14	14
千葉	14	14	14	14	14	14	14
さいは	14	14	14	14	14	14	14
札幌	14	14	14	14	14	14	14
仙台	14	14	14	14	14	14	14
名古屋	14	14	14	14	14	14	14
大阪	14	14	14	14	14	14	14
福岡	14	14	14	14	14	14	14

朝日新聞東京本社

〒104-8011東京都中央区築地5-3-2 電話03-3545-0131 www.asahi.com

本日の編集長=佐古浩敏

